

鉢木
はちのき
HACHINOKI

浦田 保浩

弱法師
よろぼし
YOROBOSHI

片山九郎右衛門

忠度
ただのり
TADANORI

越賀 隆之

高砂
たかさご
TAKASAGO

田茂井廣道

春の素謡と仕舞の会

言葉の響きの美しさ――。

素謡 能の台本を謡い語る

仕舞 能の一部を紋付袴姿で舞う

入 場 料

春・夏通し券 8,000円(前売のみ)

[当公演と7/12「夏の素謡と仕舞の会」チケットの2枚セット]

一般前売 4,500円

一般当日 5,000円

学 生 2,500円

全席自由席

※通信講座受講生、放送大学、老人大学は一般料金

● チケットのお申込みは、お電話またはチケット販売サイト、出演能楽師へお願いいたします

日時

令和8年 3月8日(日)

午前11時開演 (10時30分開場)

会場

京都観世会館

京都市左京区岡崎円勝寺町44(東山仁王門東入)

ご予約・お問合せ

京都観世会館

京都市左京区岡崎円勝寺町44

TEL.075-771-6114

<http://www.kyoto-kanze.jp>

チケット
販売サイト



春の素謡と仕舞の会

令和八年三月八日(日)
午前十一時開演(十時三十分開場)

高砂

河村浩太郎
田茂井廣道
橋本 光史

片山 峻佑
河村浩太郎
河村 和貴
松野 浩行
林喜右衛門
橋本 光史

浦部 幸裕
大江 信行
樹下 千慧
吉浪 壽晃
橋本 磯道
宮本 茂樹

忠度

越賀 隆之
分林 道治

青木真由人
宮川 卓也
鷺尾世志子
吉田 篤史
河村 晴道
越賀 隆之
青木 道喜
分林 道治

休憩二十分

宮本 茂樹
井上 嘉介
河村 博重
橋本 充基
橋本 潔司
橋本 雅夫
橋本 光史

弱法師

片山九郎右衛門
味方 玄

浅井 風矢
寺澤 拓海
大江 泰正
橋本 忠樹
浦田 保親
古橋 正邦
片山九郎右衛門
味方 玄

歌占キリ
松井 美樹
武田 邦弘
吉浪 壽晃
吉田 和史
大江 信行
橋本擴三郎
樹下 千慧

鉢木

浦田 保浩
河村 晴久
弘之助
井上裕之真
大江 広祐
深野 貴彦
谷 弘之助
味方 團
浦田 保浩
杉浦 豊彦
河村 晴久

附祝言
(終了予定 四時前)

主催 公益社団法人 京都観世会

※時間はおよその目安です

高砂

早春の高砂(前場)、住吉(後場)が舞台。世阿弥作。

九州の阿蘇の神主・友成が京に上る途中、播磨高砂の浦に立ち寄ります。そこで出会った老人夫婦に高砂住吉相生の松の調われを尋ねます。老人は高砂を『万葉集』の時代に例え、住吉を『古今集』の時代に例え、時代を経て変わらぬ松の葉を、言の葉とかけ、松葉の繁栄こそが言葉の繁栄と説き、和歌の繁栄が平和の象徴であることを教えます。松の功徳を語るうち、老夫婦は実は相生の松の精であると明かし、先に住吉に行きお待ちしようと言って舟に乗って沖へ出て行ってしまいます。友成も急いで舟に住吉へ着くと、和歌の神・住吉明神が現れて、神威を顕し泰平の御世を祝福するのです。

忠度

春の須磨浦が舞台。作者の世阿弥が「上花」と高く評価した作品です。平忠度の和歌の師匠・藤原俊成に仕えていた者が出家し、西国行脚の途中の須磨浦にやってきました。そこで、ある桜の木に花を手向ける尉に出会います。尉に宿を頼むと、この花の下にまざる宿はあるまいと、「行き暮れてこの下を宿とせば花や今宵の主ならまし」と詠んだ薩摩守・忠度がここに眠っているのだと語り、僧に回向を頼みます。やがて尉は忠度の霊であることを暗示して姿を消します。回向する僧のもとへ忠度が立ち戻りし日の姿で現れ、西国への都落ちの途中、俊成のもとへ立ち帰って後日の勅撰集への和歌を託したと、一ノ谷の合戦で討たれたこと等を語り、桜の花の蔭に消えてゆきます。

素謡(すうたい)とは

能の台本(謡本)を、舞台上で謡う演奏形式です。謡うこと・語ることで情景や心情を表現します。能には『源氏物語』や『平家物語』などの古典を題材にした名作が多く伝わっており、詞(詞章)の美しさは高い評価を得ています。素謡はその謡うこと・語ることをのみのシンプルな表現の面白さから、大正の頃より大変な流行となりました。また、京都には歴史的に「京観世」とよばれる「素謡」の文化があります。江戸初期寛文の時代、服部宗八(九世観世大夫黒雪の弟、服部権左の息、のちに福王盛親)が、西陣にあったといわれる観世屋敷で謡の教授をしたのが始まりです。以後、京都では能だけでなく、人々が謡だけをたしなむ「素謡」というジャンルが好まれ、連綿と受け継がれてきました。戦前は、京の辻々で謡の音がよく聞かれたようです。情緒豊かな「素謡」をライブでじっくりと聴いてみてください。

仕舞(しまい)とは

能の一部(見せどころ)を、紋付袴姿で、謡にあわせて舞う演奏形式です。ほとんどの曲は扇を持ちますが、演目によっては長刀や杖などを持つものもあります。舞い手の骨格が見えやすいので、能のデッサンと評され、演者の個性と技を際立たせます。数分の演技で能の醍醐味が味わえるのが仕舞です。

弱法師

春の彼岸、摂津国の天王寺が舞台。作者は世阿弥の子・観世十郎元雅(ただし曲舞部分には世阿弥作)。かつて人の譏言を信じてわが子・俊徳丸を追放してしまつた河内国の高安通俊は、わが子を不憫に思ひ、現世と来世の安楽を祈るため天王寺で、わが子を行を、今日が満願の日。そこへやがて来た盲目の青年・弱法師は、袖に梅の花が散りかかると仏の慈悲と感謝し、天王寺縁起を語ります。彼がわが子であると気づいた通俊は、夜になってから名乗ろうと、日想観(日没の方向を見て、極楽浄土を観想すること)を勧めます。弱法師は入り口を見、見慣れた難波の景色を心の眼で見渡しますが、盲目ゆえの辛さも垣間見えます。やがて夜も更け通俊は名を明かし、俊徳丸を伴い高安の里へと帰るのです。

鉢木

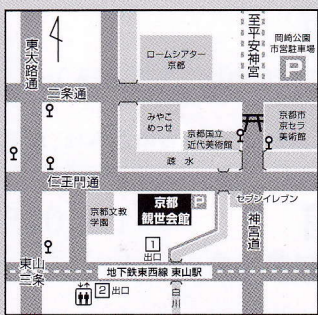
鎌倉時代中期が舞台。鎌倉へ向かう旅僧(実は最明寺入道時頼)が上野国で大雪に見舞われ、ある夫婦に一夜の宿を頼みます。暖を取るため、宿の主は秘蔵の鉢木(盆栽)を火に焚いてくれます。暖を取った常人は思はずその名を尋ねると、佐野源左衛門常世と名乗り、一族に横領されて零落しているもの、いざ鎌倉に大事あらば馳せ参ると志を述べます。舞台は鎌倉へ移り、あれから間もなくして、鎌倉で兵が集められることになりました。執権である時頼は彼の中から賞世を探し出し、過日の旅僧は自分であつたと告げ、彼の忠誠を賞して旧領を返さず、さらに鉢木のもてなしの報酬に、その木に縁のある梅田・桜井・松井田の三ヶ庄を与えます。これを賜つた常世は歓喜して郷里へ帰っていくのでした。

※上演中の写真撮影・録音・録画はお断りします。
※携帯電話の着信音・時計のアラーム音が鳴らないよう、あらかじめ電源をお切りください。
※都合により出演者に変更がある場合がございますので、あらかじめご了承ください。
※お車の方は、会館東隣りの有料駐車場、または岡崎公園市営駐車場等をご利用ください。
※公演中止の場合を除き、入場券払戻はできません。

予告 夏の素謡と仕舞の会

令和八年 7月12日(日) 午前11時開演

素謡	「雨月」橋本雅夫	仕舞	十番
	「通盛」杉浦豊彦		
	「檜垣」観世清和		
	「阿漕」青木道喜		



【交通アクセス】
JR京都駅から
●地下鉄烏丸線「烏丸御池駅」にて地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車、1番出口より徒歩約5分
●京都駅前バスのりばA1より市バス5系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車、D2より86・206系統「東山仁王門」下車(乗車時間約30分)
四条河原町から
●バスのりばより市バス31・46・201・203系統「東山仁王門」下車(乗車時間約15分)
京阪三条駅から
●市バス5系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車
●地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車